

雲岡石窟に於ける

「宝珠」をめぐる諸問題

仲 嶺 真 信

はじめに

仏教世界に於て、その信仰の所産は、無数に認められるが、中でも所謂「宝珠」は、極めて象徴的かつ神秘的な存在として傑出してゐる。それは簡潔には、清浄なるもの及び威徳あるもの、或いは、總ての希求を成就せしむるもの等と定義づけられる。それはともあれ、要するに、万能に働く神聖なるものである。

一方、所謂「宝珠」の形態に関して、我々が、一般的に抱くイメージは、例えば、仏塔相輪上、或いは、八角円堂露盤上等によく認められる珠状のそれに、大方が限られてゐると申しても過言ではないだろう。しかし、管見によると、それは、一般的に周知の珠状だけではなく、稀有ではあるが特異な非珠（角状）も敷衍することが知られる。

さて、この種の「宝珠」の分布と展開は、その西端の中央

アジア・クチャ地域から、一方東端の高句麗に至るまでの広範囲に渡り、ほぼ五世紀後半から八世紀にかけて確認される。しかしながら、私は寡聞にして、未だに、その系統的な研究がなされているのを知らない。従つて、それは、今後の研究成果によつて、徐々に明らかにされるであろうが、本論は、その基礎的研究の一翼を担うものである。具体的には、本論に於て、私は、現段階としては、この種の「宝珠」の最古例（五世紀中葉）と考えられる雲岡石窟の諸例に焦点を絞り、雲岡様式を検討しながら、特異な「宝珠」の諸問題について若干の考察を試みたい。

一、名 称

さて、本論の主題となる象徴的形態については、既に「雲岡石窟」の著者が、「摩尼宝珠」と命名し、若干言及を試みてはいるものの、そこには後述するように多少の疑義

が残されている。因に、前掲書の著者は、グリューンウェーデル氏の高著等に収録される中央アジア地域の象徴的形態と雲岡のそれとを比較検討した結果、グリューンウェーデル氏の説をそのまま踏襲し、「摩尼宝珠」と命名されたのであった。ところで、私は既に、前掲書の著者とは全く別の根拠をもって、この種の形態について、端的に「宝珠」という名称を決定している。即ち、私は、拙著に於て、中央アジア・トユク遺蹟出土の壁画断片資料をもつて、形態と名称とが直結されることを指摘しかつ言及を試みた。⁽⁵⁾

ともあれ、三者は、結論として、見解の一致をみた訳であり、換言すれば、グリューンウェーデル氏及び前掲書の著者の説は、私の呈示した全く別の例証を加え、従来よりも一段と強く支持され、補強されたといえよう。

二、所 在

概して、仏教芸術に於て表現された所謂「宝珠」の配置は、高所や目立つ所、或いは重要な位置等に極めて多く確認されるが、それは少なからず特殊な取り扱いを受けている。このことは、雲岡の場合も例外ではない。但し、本論では便宜上次のように、石窟内の宝珠を所在位置別に分類し整理してみた。

〔一〕光背及び仏龕面

(一)第十七洞東壁左脇大龕内坐仏光背面及び仏龕面

(二)第六洞主室方柱北面下層本尊二仏並坐像西方仏光背面

〔二〕天井及び拱額面

(一)第七洞

(A)主室南壁中央拱額

(B)主室天井格間

(二)第九洞

(C)拱門天井

(D)主室南壁拱額

(E)前室北壁上層東龕二仏並坐像上部

〔三〕明窓側壁面

(一)第十三洞明窓東壁

以上、三種に大別されるが、何れの場合も宝珠は、諸天人に挾扶或いは囲遶され祀られている。因に、宝珠の表現される位置について、中央アジア地域と龍門石窟の各々の例を比較すると、前者では(A)頭部⁽⁶⁾(B)水中(C)虚空中(D)手中等に、一方後者では(A)頭部⁽¹⁰⁾(E)光背及び仏龕面等に確認される。雲岡では、仏・菩薩の頭部に宝珠を安置する例は一つも認められず、殆んど中央アジア同様、手中や虚空中に表現される。尚、雲岡と龍門の宝珠は、共通して光背及び仏龕面に検出されるが、しかし、その様式は、厳密にはかなり異なる⁽¹¹⁾。

さて、前記の宝珠が、石窟構造空間に於て、どのように配置され表現されているのかについて、五石窟を概観しながら、次に述べてゆこう。

三、諸洞概観―配置と表現―(挿図1)

(一)第十七洞(挿図2)

奥壁・本尊交脚菩薩。本像は殆んど丸彫りに近く、然も石窟空間の全体を占有する程に巨大。壁面は殆んど剝落しているが、本尊を囲む光背のみ表現。

東壁・ほぼ中央層南寄りに坐仏大龕。その内部に、我々の主題の宝珠を有す(詳細は後述)。

尚、龕内仏坐下に香爐と供養者を配す。又、大龕周辺には千仏諸龕、二仏並坐像、交脚菩薩像等の配置が目立つ。西壁・ほぼ中央層一杯の南寄りに立仏大龕、周囲は東壁同様の諸仏が並ぶ。

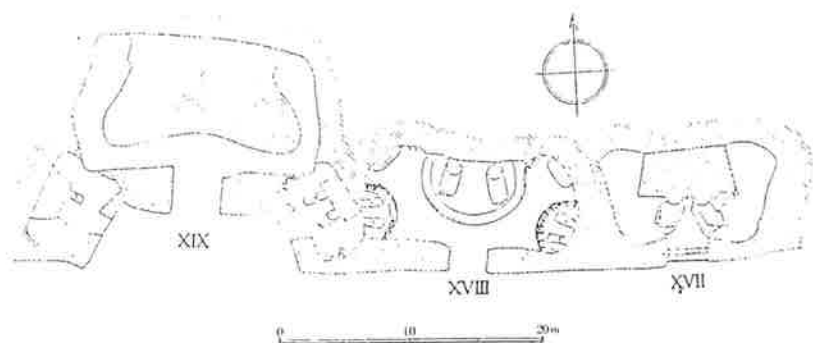
南壁・明窓と拱門を有し、上下二層の配分。壁面の東西両部共に、比較的よく似た大中小の諸仏龕(千仏構成、交脚菩薩像、二仏並坐像等)が並ぶ。尚、東部大龕仏は、阿弥陀三尊と考えられる。又、この台座下に香爐と供養者を配置。

さて、宝珠は前述のように、東壁左脇大龕及び大龕内坐仏光背面に確認されたが、ここではその特徴を明確にするために西壁右脇大龕立仏光背との図樣的比較を試みながら考察を進めたい(以下挿図3③④⑤ 図版1③④⑤参照)

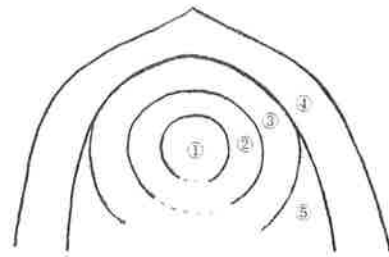
- ①は芯部で復弁の大蓮華(東西両壁光背共通)。
- ②は内圈帯で、東壁では飛行天人教体が、芯部頂上で中央



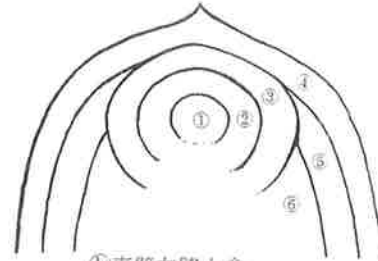
挿図1 雲岡石窟平面図



挿図2 第17洞・第19洞平面図



㉔西壁右脇大龕



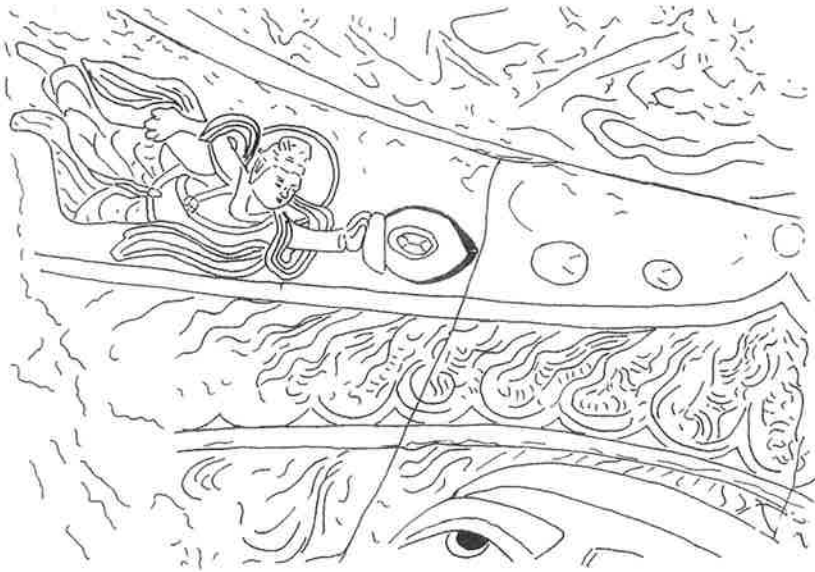
㉕東壁左脇大龕

挿図3 第17洞

- の宝珠を挟み囲邊。西壁では坐仏群が禪定印で囲邊。
- ③は中圈帯で、東壁では焰に包蔵された宝珠群が、環帯内の各区画中に配されて囲邊。西壁では内圈帯頂上部で、左右対称になる半パルメットの連続文帯を配す。
- ④は外圈帯で、両壁共にめらめらと激しく燃えあがる火焰帯を表現。
- ⑤は東壁では、跪坐合掌天人群からなる縦帯。その最頂部の尖鋭な剣先状空間に、③と同種の宝珠が存在(挿図4)。同様に西壁でもそこには、天人及び火焰の表現が認められるが、火焰内部に宝珠があるかどうかは判然としない。
- ⑥は火焰帯と考えられる。



挿図4 第17洞東壁左脇大龕坐仏及び光背面



挿図5 第17洞東壁左脇大龕光背右頂部

更に、東壁の左脇仏大龕光背左頂部及び右頂部にも、天人に奉持された火焰宝珠が各々配され、又、その先方にも各々二個ずつ楕円状が検出されるが、これも同種の宝珠と考えられる(挿図5)。

ところで、東壁大仏龕坐仏は禪定印をし、尊容には神々しい威厳が充溢している。前記の諸天人は、この坐仏に対し、合掌或いは宝珠を奉持しながら、恭敬・尊重・讚歎・供養しているかの如く表現されている。尚、第十七洞と類似する例は、第六洞にも認められるので、後程一括して若干の説明を補足したい。

第六洞

主室中央に方塔を配し、右邊の修法の行なわれうる構造(挿図6)又、方塔、周壁共に明窓床面を界として、上下二層の統一的構成。

北壁下層・三尊仏龕。

東壁下層・中央に千仏龕を配し、南北の仏龕に坐仏を置く。

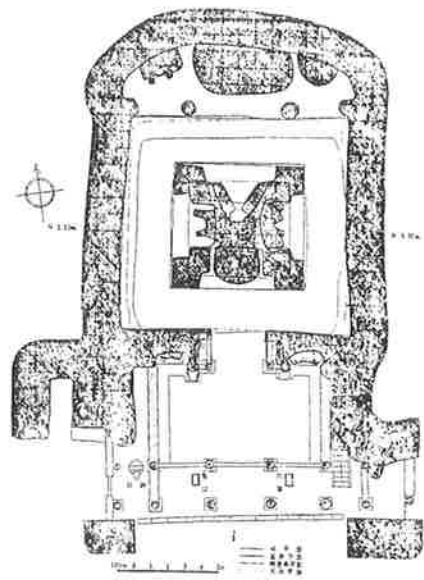
西壁下層・中央に坐仏龕・南北仏龕に各々交脚菩薩像を配す。

方柱(四方四仏龕)

下層南龕・坐仏。

下層西龕・倚像。

下層北龕・二仏並坐(東方及び西方像)。



挿図6 第6洞平面図

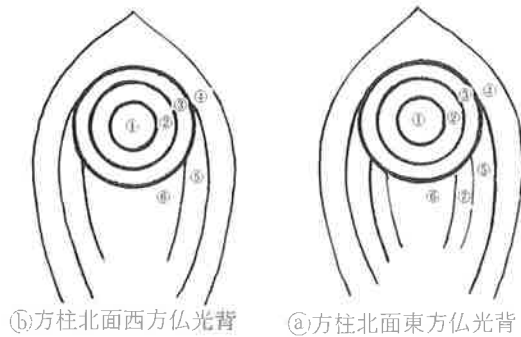
西方仏光背面に宝珠が認められる（詳細は後述）。
 下層東龕・交脚菩薩像。
 以上の何れも摺拱龕形式で、周辺には獸形や諸天人が配される。尚、方柱四面の龕傍壁に表現された諸仏は南から右⁽¹⁶⁾に展開。

方柱上層・四方四仏が各々背中合わせに並び、四隅には九層方塔を配し、各々主尊に対して菩薩立像を二体ずつ置く。周壁上層・ほぼ同様の立仏十一組が三尊形式で遶る。南壁・明窓と拱門を有し、東西両面共に同設計。中央層には、東西に五層方塔を配した屋形龕内で、中央に坐仏を

挟む問答配置の文殊・維摩⁽¹⁷⁾像。
 周壁腰壁・二十余所の仏伝⁽¹⁸⁾図。
 明窓・東西両面摺拱龕内に半跏思惟像。その下に須弥山状を配す。
 窟内最上層は樂天群帯。その下は花索を持つ天人群。更に下には坐仏群。
 天井・方柱を遶る格天井。その一つくに多臂像、騎獸像、天人等が散見。

さて、宝珠は方柱北面下層本尊二仏並坐像の西方像光背面に検出されたが、次に、その特徴を明確にするため東方像光背との図樣的比較を行ないたい（挿図7・㉑㉒ 図版II・㉑㉒）。

①は芯部で東西両者共に複弁の蓮華。
 ②は内圈帯で西方では禪定印坐仏帯が囲繞。東方では飛



挿図7 第6洞

行天人群が、左右からその頂上部へ上昇しつつ囲遶。

③は中圍帯で西方では、火焰に包蔵された宝珠群が、環帯内の各区画中に配され囲遶。東方では、めらめらと激しく燃えあがる火焰帯を表現。

④は外圍帯で両者共に激動する火焰帯。

⑤は両者共に縦列に飛行天人群が並ぶ。

⑥は両者共に火焰を配す。

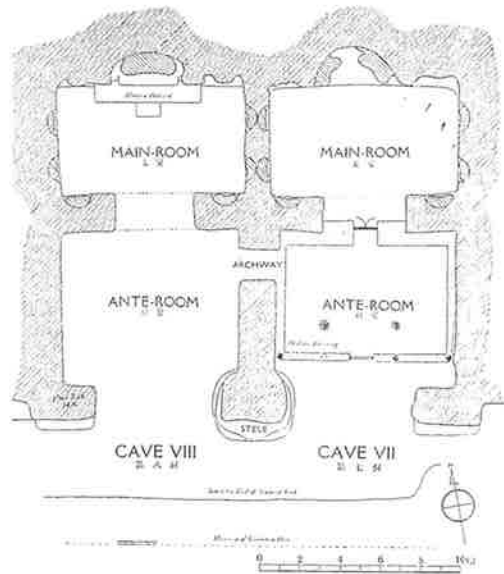
⑦は東方仏光背に付く半バルメットの連続文の縦帯。以上、両者は共に獸拱龕内に存し、その上方中央部には諸天人が認められる。

ところで、前述の第十七洞及び第六洞の光背の表現を再見すると、両者共に、めらめらと激動する火焰の曜威、及び諸仏の静穏な威嚴、或いは諸天人の軽捷に飛翔廻廻且つ歡喜踊躍する神秘的境界が看取される。そこは全てのもものが清浄であり、又、遍く威澤が充溢している。このような神聖なる仏国土の中で、宝珠は四方八方隈なく、充滿せるその威光を十分に照明するかの如く燦然として嚴存している、と解されよう。

更に、善根をもち、このような宝珠の輝耀を觀たり触れたりする様々なものは、全て、あらゆる希求の成就されることを得ることができるとはせずである。あたかも仏の如く森嚴として存在している宝珠を、諸天人は、種々の讀法をもって恭敬、尊重、讚歎、供養し奉っている、とも解釈できよう。

第七洞

第七、八両洞は、第九、十両洞同様一对洞で、主室と前室から成る。この二組の一对洞は雲岡に於て、極めて建築的意匠の豊富な石窟であり、曇曜五窟とは全く別構造（挿図8）。主室の奥壁に二層の壁龕、他の三壁には四層の仏龕を配置。奥壁上層・摺拱龕内中尊交脚菩薩像、兩脇侍倚像・更にその外側兩脇に半跏思惟像二体。最上層小仏龕内に諸案天。



挿図8 第7・8洞平面図

奥壁下層・二仏並坐仏龕、その上方に交脚仏を左右から挟む倚像数体、又、花索を持つ天人群を配置。
東西壁・各々坐仏、交脚仏、窟塔を配す四層各二龕ずつの同設計。

南壁・明窓と拱門とを上下二層に配分。東西両部は、ほぼ左右対称の配置。上から交脚菩薩、坐仏二段。腰壁上部の東面推拱龕内に維摩、西面天蓋龕内に文殊。拱額面に跪坐合掌供養者像、その下部で、左右から樂奏天人が中央の宝珠を挟む(図版III・㉑㉒)。

前室西壁・千仏構成。

前室東壁・本生図。

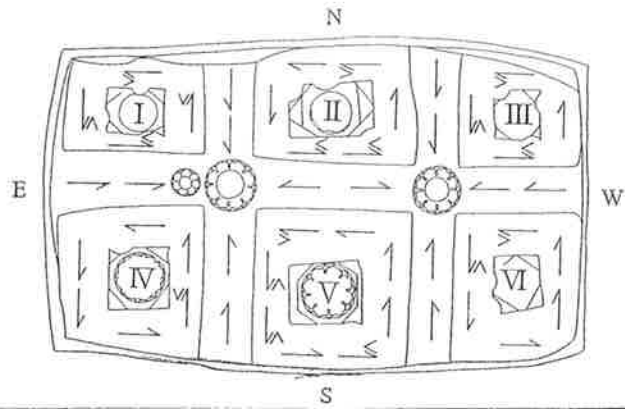
明窓・兩側部樹下修道僧二体、人柱像。

拱門・兩側壁多面多臂像、門神像。

主室天井(挿図9・図版IV)。

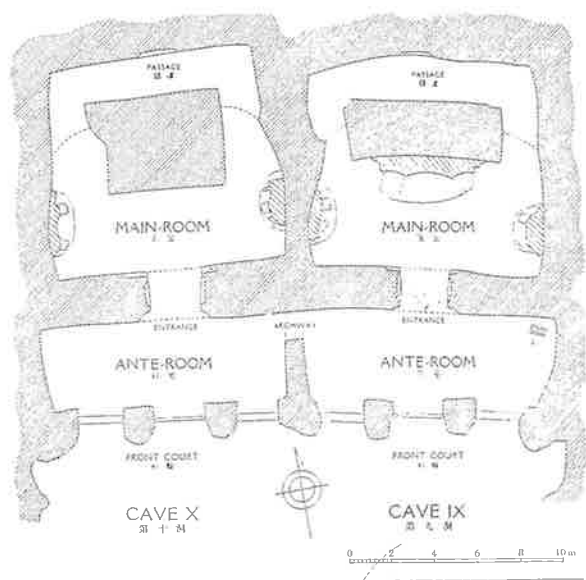
天井は梁が交叉する格天井。各々の格間は一定しないが、殆どが折り上げ式の三角持送り構造。(便宜上I~VIの番号で各格間を整理しておく)。図のように各梁の交叉により六格間(I~VI)が構成される。交叉する真中の梁上東西部には蓮華を配す。一方前記の三角持送り構造中にも大蓮華を置く。又、天人群は図の矢印の如く各々の格間内にて、中心の蓮華の方向に頭を向け、然も逆時計廻りに遷る。尚I~IIIの各々の天人数に二体ずつ加えると、

IV~VIの各々の天人数になる。Vの天人数は最も多くかつ宝珠を奉持する二天人(図版V)が確認されるので、天井空間に於て最も重要な位置であると了解される。尚この宝珠と南壁拱額面のそれとは共に奥壁へ向けて奉獻されるように配置されている。



挿図9 第7洞主室天井天人配置図

第九洞



挿図10 第9・10洞平面図

第十洞と共に雲岡石窟造営史上、転換期に位置する前駆的な一対洞で、前室と主室をもつ（挿図10）。
主室北壁・中尊釈迦倚像。その左右から背後にかけて繞行の儀法を修するための通路、即ち隧道が設られ、その壁

面には、先導する僧侶と追隨する供養者列群を配置。尚、東西側壁には、北壁中尊の両脇侍として巨大な菩薩立像を三尊形式で配す。又、東壁は仏像が僅かしかみられず、一方西壁は四層の諸仏龕。

主室南壁（図版VI④⑤）。明窓と拱門があり、東西両部壁の各々三層に、坐・立仏の諸仏龕。拱額面には、屋形龕内で左右から坐仏を挟む跪坐合掌像八体、中層上部に中央で左右から香爐を挟む奉持する天人八体、又、中層下部に坐仏十一体、更に下層に中央で左右から宝珠を挟み奉持する天人六体を配置。尚、第二層据拱龕の諸区画中の図様はキジールのそれと類似。

拱門天井・承盤上の焰に包蔵された大小の宝珠群を、上下になった天人四体が奉持（図版VII）これは主尊釈迦像の方向へ漸進していく構図。又、門口の二層の東西壁には、上層に跪坐合掌供養像三対ずつ、下層には菩薩立像一対を配置。

明窓・天井面では中心の大蓮華を囲繞する天人群。東面には蓮上の菩薩坐像・西面には騎象菩薩坐像を対置し、各々は須弥山状の上に配置。

前室北壁・最上層高欄上に楽奏天人群。上下二層の東西両部に二仏並坐、交脚菩薩像等の諸仏龕を同構図で対置。

拱額には屋形、その下で花索を持す天人八体が中央で香爐を挟む。又、その両脇には、執戟の門神二体。尚、東

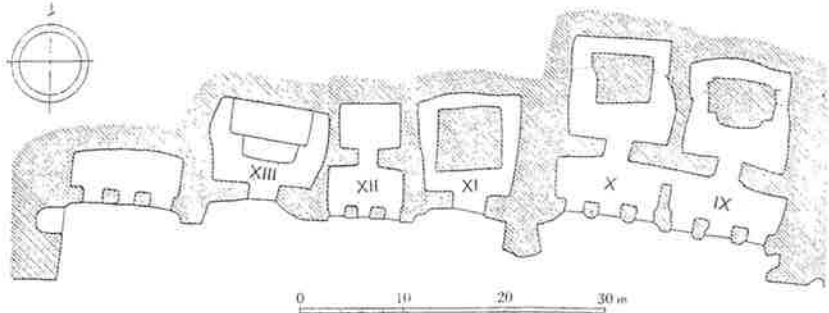
〔面第二層（上層東龕）〕二仏並坐像上方には、中央で宝珠を奉持する左右三体すつの天人を配置（図版Ⅷ）。前室東西壁・両者共にほぼ同設計で二層の諸仏龕。両下層の坐仏龕には香爐が認められる。前室腰壁・本生図がパネル状に遶る。主室及び前室天井・図式化した三角持送り構造、尚主室天井には多臂像が散見。

第十三洞（挿図11）

北壁・本尊交脚菩薩像。
天井・平頂で、そこに双龍と諸天人が混在。
東壁・五層の諸仏龕を配し、二層の腰壁上部はその上層に香爐や普を奉持する跪坐合掌供養像九体を置く。
西壁・おそらく東壁同様の諸仏龕を配してあったと考えられるが、現状では僅かに残存。
南壁・明窓と拱門があり、四層の諸仏龕が並ぶ。尚、拱額面には本尊弥勒像に対応すべく配置された過去七仏が、屋形龕内に安置され注目される。腰壁には合掌供養する胡服像十四体を配置。
拱門・東西壁面に各々執戟の門神。
明窓・東西壁面に各々菩薩立像一対を配す。尚東方像は右手の基台上で、焰に包蔵される宝珠を捧持し、左手には宝瓶を下げる（図版Ⅸ）。一方西方像は左手に大半が破損

した持物（香爐）を持ち、右手は殆んど剝落（図Ⅹ）。何れの像にも、近くに須弥山状があり、又、天蓋は中央アジアでよく認められるものと類似。

ところで、前述の第七、九、十三洞の宝珠は、香爐と共に諸天人や菩薩に奉持されていた。それをもって、それらは諸仏を讃頌、供養し、石窟に於て無価の神秘的輝耀や妙香を放ち、充滿させ、清浄なる仏国土を現出させていると看取できよう。同様に、このような神聖なる空間に於て、或る者は合掌し、或る者は種々の楽音や伎楽、或いは舞戯し諸仏を讃頌し、又或いは種々の華、香、瓔珞、幡蓋及び諸の蔽身の具、珍宝、



挿図11 第9～13洞平面図

妙なる物をもつて、皆共に、釈迦牟尼仏の住せる娑婆世界に散ず、⁽¹⁰⁾ というような表現が、前記の諸同の場合展開されているとも了解されよう。

四、「宝珠」の特徴

さて、これまでに我々は、石窟構造空間に於て、宝珠及び香爐を中心とした諸図様の配置を概観してきた訳だが、ここでは前述の宝珠を本体と外形とに区別してその特徴について述べていく。

(一) 宝珠の本体 (挿図12・①～⑨参照)

図のように、宝珠の本体は、厳密には細部に若干の差異が認められるが、外側が細長の六角形状の輪郭を描くことは全て一致する。尚、第七洞 (挿図12・①②) の例は、本体の中央にY字形或いは逆Y字形の意匠が認められず、逆に、二重の六角形状が施されており、雲岡に於て初出であり、中央アジアに於ても管見の及ぶ限り未確認である。同様に第九洞の例 (挿図12③) の如く、尖頂部にある線状が施されるのも雲岡で初出である。しかしながら、特に第十七及び第六洞の例 (挿図12・⑤⑥) は、中央アジア地域の同種の宝珠と形状が近似する。但し、中央アジア地域の宝珠の尖頂部に検出された交叉した意匠 (挿図13) は、雲岡に於ては一例も未確認である。

以上、本体からみた雲岡の宝珠は、中央アジア的基本形を

一部分踏襲しながらも、一方では雲岡的変種へと移行していることが認められる。要するに、中央アジアから雲岡へ至る間に、何らかの要素が混入していると考えられる。

(二) 焰と全形 (挿図12参照)。

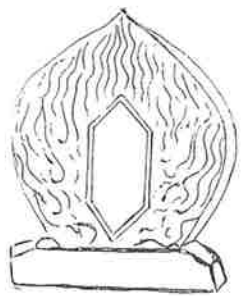
図示した諸例は、二種に大別される。

① ゆらめく不均整の焰 (挿図12・⑤⑥・仮称A型)。

中央アジア・トユクの場合 (挿図13⑬) 放射する焰の形状は、このように不均整ではなく、かなり均整形であり、又、発焰の位置はある程度一定化し限られていた。雲岡の焰の形は、トユクの場合と同一ではないが、その性質や状態から、かなり類似しているといえよう。

② 外形に於て均整形をなす焰 (挿図12①②③④⑦⑧⑨仮称A B型乃至B型)。

トユクの場合には、発焰の方向は、三・四ヶ所にほぼ限られていて、然も相互に各々の焰が接近していても、決して完全に融合することはなかった。雲岡A B型は内部の焰はめらめらと揺れるA型であるが、外形では、丁度蓮弁状の均整形を保つ(B型)。換言すれば、恰も宝珠本体を囲む光背の如く焰は整美され統一化されている。因に、この火焰光背形が、所謂「宝珠形」として、後世に発達するという先学の説があるが、私見を加えると、宝珠本体とその焰の表現とは厳密に区別して考えるべきであり、又、宝珠本体に関する珠状と角状との発生問題に



① 中央拱額面
第7洞主室南壁〈A、B型〉



③ 天井面
第9洞拱門〈A、B型〉



⑤ 光背中圈
第17洞東壁左脇大龕
〈A型〉



② 天井格間
第7洞主室〈A、B型〉



④ 拱額面
第9洞主室南壁〈A、B型〉

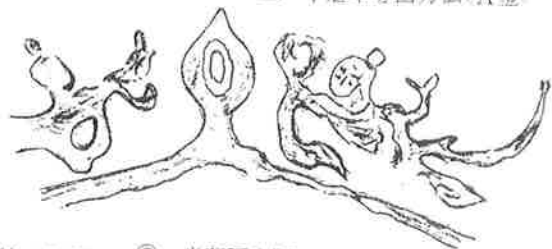


⑥ 光背中圈
第6洞主室方柱北面
下層本尊西方仏〈A型〉



第17洞東壁左脇大龕

⑦ 大龕右(向)頂面天人奉持〈B型〉

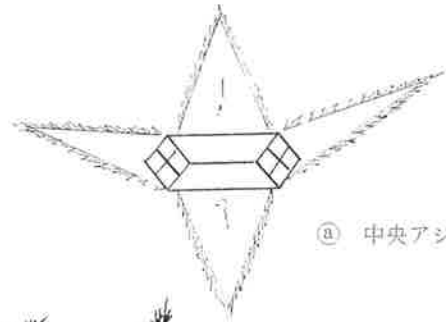


⑧ 光背面内圈〈A、B型〉

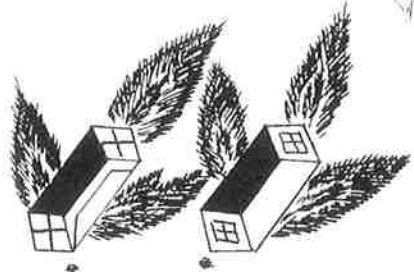


⑨ 第13洞明窓東壁〈A、B型〉

挿図12 宝珠の諸形態



① 中央アジア・クチャ



挿図13 ①中央アジアトユク



② 中央アジア・トユク

於て、その何れが先か後か、或いはどのような関連が両者にあるのか等、未解決の諸問題が残されているので、前記の説には承服し難い。

さて、雲岡の宝珠は、その本体を包蔵する焔が光背形となつたり、或いは大宝珠のまわりを数体の小宝珠が発焔しながら囲繞しているが、これらの例も雲岡で初出で注目される(挿図12・③)。

以上、完全にトユクの例と同種のもの、一例も認められないが、雲岡A型は幾分トユクのそれに近い。前述と同様に、ここでも雲岡的変種が認められる。尚、雲岡では、宝珠全体を支える基台(挿図12・①②)、或いは承盤(挿図12・③)等が確認されるが、この種の台状或いは盤状等は、管見の及ぶ限り雲岡に於て初出である。

前述のように、所謂「宝珠形」は、宝珠本体は無論のこと、焔や台及び盤等によつて、その全体が形成される。ところが、この形態と極めてよく似ていて、実は全く異なるものがある。即ち、香爐であるが、これは後述するように、その判断に困難を伴う場合が多少ある。従つて次に、若干両者の比較を試みよう。

五、宝珠と香爐

この両者は、注視さえすれば自らその特徴によつて区別され、全く違うことに気づくはずである。つまり、香爐の大方



挿図14 香爐の諸形態

挿図15 龍門第14洞菩薩持持

は、挿図14のように、その本体の球体面横に二条程の線が認められ、又、上半分には須弥山状等を表現する他は、余り意匠的なものは認められない。一方、宝珠の場合は、その中心に宝珠の本体を包蔵して、然も、香爐のように数条の横線がないので、擬視すればその判断を誤ることはない。

さて、この両者は形態のみならず、配置や意味の上からも極めて注目すべき関連を有している。例えば、第九洞拱門天井(図版VII)と第十洞拱門天井(図版XI)とに、各々宝珠と香爐が検出されるが、この二洞は一对洞であることから首肯されるように、その配置は甚だ関連深い。前者は主尊倚像へ向けて宝珠を、一方後者は交脚像へ向けて香爐を奉獻せんとする天人群が表現されている。両洞の宝珠と香爐は、配置上両者を自由に交換してもよい程に緊密である。このような関係が、一石窟空間に於て強く働いていると考えられるのが、第九洞の門口から南壁拱額へかけての壁面である(図版VI参照)。そこには、諸天人に奉持され、恭敬され、尊重され、供養されている宝珠と香爐とが存在する。配置上、南壁は奥壁の主尊に對面するが、ここにも極めて興味深い對置関係が伺える。

ところで「大智度論」中の一節に「四角皆懸摩尼寶珠以為燈明。及四寶香爐常燒明香」とあるが、ここでは宝珠が燈明として、又、香爐は明香を焼くものとして存在する。因に「法華經」によれば、燈には種々あり「これをもって供養せ

ば、得る所の功德は亦復無量ならん⁽⁴⁷⁾とされる。更に、燈明に關連する例としては、「この法華經も亦復かくの如し、千万億種の諸の經法の中において最も為れ照明なり⁽⁴⁸⁾」(傍点筆者)とある。何れの場合も、功德や輝耀に於て卓越するものとして蔽存する。

ここで若干当時の石窟の状況を推察してみよう。まず薄暗い石窟内に於て照明の役目を果たすものは、自然光、或いは燃える焰をもつ燈明の輝耀以外には何もありません。相違ない。神聖なる石窟空間に於て、儀式を修するに際し、当然、自然光や燈明は常用されたであろうが、理念上、燈明は、未永却滅尽することのない法燈の輝きとして存在せねばならないはずである。この空間は、単なるそれではなく、信仰の威力によつて、無量無辺の様々な奇蹟を現じうる仏国土と解釈される。ここに至り必然的に、絶対的・象徴的な輝きが要請される。従つて、この輝きは、恰も仏の曜威の如く、汚濁なく燦然と隈なく仏国土を照明する役割をもつ。或いは、仏が「慧の燈明⁽⁴⁹⁾」として存在するが如く、この宝珠もその輝きを観る者及びそれに触れる者は全て清浄なる「さとり⁽⁵⁰⁾」の世界へ導かれてゆくように企図されているとはいえないか。

一方「香」の場合、抹香、塗香、焼香等種々みられるが、この香をもつて供養する者は、「未來世において必ず仏と作ることを得ん⁽⁵¹⁾」とされる。又、香は、求法者の六根清浄の一つとして存在し、煩惱を断ち諸仏の所在を知りうる威力をもつ。

以上のように、宝珠と香爐は、極めて重大な役目を担っている。つまり何れも、求法者を最高のさとりに導く存在であり、又、威徳の充盈するものと考えられる。

六、雲岡に於ける角状「宝珠」の起源

さて、角状「宝珠」は、雲岡初期の第十七洞に始まり後期の第六洞に至るまでに、数例検出されたが、その起源を辿る方法は、大別して二種考えられる。即ち、その一は、雲岡に於ける西方様式に着目し、更にその構成要素を分析し、各々を具体的に観察していく方法。その二は、雲岡石窟造営の背景から裏付けていく方法。以上の二方法は共に後述するように密接な連関を有す。

ところで、雲岡に於ける西方様式は、単一様式ではなく、次の三種が主な構成要素となっている。つまり、○ガンダーラ様式○中インド様式○中央アジア様式。以上の三要素のうち○中央アジア様式は、後述するように、特に本論の主題と緊密である。従つて我々は、角状「宝珠」の起源を辿る方法として、中央アジア様式を最も重視しなければならない。結論を先に述べると、この種の宝珠の起源は、既に先学によつて、中央アジア地域に存在すると指摘されている⁽⁵²⁾。しかし、管見によれば、雲岡と中央アジアの両者の宝珠の特徴には、前記にも指摘したように、若干の差異が認められる。従つて両地域を結ぶ中間地域で、中央アジア様式から雲岡的変種へ

と展開するある要素の混入を想定しない限り両者の関係は、より具体的にはならない。つまり、両地域の中間に、雲岡の先蹤をなす作例を検出せねばなるまい。しかしながら、私は尋問にしてそれを見つけていない。

ともあれ、この種の宝珠の起源は、中央アジア地域に求められる。しかし、厳密には、それは本来の発生源であるとは断定できない。但し、管見によれば、それは、中央アジア・クチャ地域よりも更に西方のどこかに存在すると推測される。さて、ここでは、まず雲岡に於ける宝珠の流入の要因について触れ、そして次に、中央アジア様式中の二、三の要素について私見を加えてみたい。

一 流入の要因

前述のように、雲岡の宝珠は、第六、七、九、十三、十七洞等に於て確認された。以上の諸洞の造営期は、第十七洞(和平元・四六〇)第七洞(和平皇興四六〇)四七一洞(皇興延興・四六七)四七五洞(第十三洞(太和元・四七七)数年間)第六洞(太和元・四七七)太和七・四八三洞)と各々比定される。上記の各年代は、和平初年に五大仏をおさめた五大窟の開鑿を帝へ奏請した曇曜の活躍乃至生存時期(太和初年頃)と図らずも重なり合う。このことを踏まえて、曇曜の周辺を採ってみると、雲岡石窟造営以前に、彼は涼州地方に於て既に高名な僧侶であったことが知られる。一方、

「釈老志」には、太延年中に涼州征服のあったことを記し、その際に、沙門仏事等の東漸にも触れているが、この涼州征服によって、曇曜や玄高及び師賢等も魏都に移任したものと考えられる。

以上のことから、雲岡初期の西方様式中には、曇曜の故園、涼州地方の様式が流入していることは十分に推察される。この涼州こそ、中央アジアと雲岡との両地域の中継地点として最も相応しい。従って、雲岡の宝珠の直接的起源地としては、第一に涼州地方があげられよう。

因に、涼州征服(四三九年)から雲岡開鑿まで(四六〇頃)は約二十年程の期間があるが、涼州地方からの技術の導入と温存という点に於ては、この期間は決して涼州地方の伝統が消滅し尽くすようなそれではないと考えられる。従って雲岡の宝珠は、多少とも涼州地方の諸要素を温存させていると推察される。この意味に於て、雲岡第十七洞の宝珠に代表される作例は、極めて中央アジア風乃至は涼州風であるとはいえないか。

前記の通り、雲岡の宝珠の先蹤をなすものは、涼州地方では未確認であるが、前述の事情から推察すると、恐らく雲岡第十七洞と同種の作例が存在するものと考えられる。その可能性を十分に秘めている石窟として、まず天梯山があげられる。しかし、この石窟については、只今関係資料を持ち合わせていないので、その詳細は分らない。何れ解明されること

を切望したい。もし、涼州地方で雲岡の先蹤をなす宝珠が検出された場合、それは、涼州よりも更に西方の中央アジアにその起源があることは、改めて私が指摘するまでもない。それは直ちにグリーンウンウェーデル氏の業績によって十分立証されることである。この意味で、雲岡の宝珠の起源は、現段階としては、中央アジア・クチャ地域に求められる。

(二) 中央アジア的諸要素

ここでは、二、三中央アジア的要素を指摘しておこう。例えば、第十三洞明窓に於て、宝珠を奉持する菩薩像頭上の天蓋。或いは、雲岡諸仏龕形式中の一例としての摺拱龕。更に次に述べるような独特の形状を示す環状の持物等があげられるが、先述の宝珠の起源との関連で、私はそれに着目し若干考察を加えたい。

(三) 環状の持物

以下に述べるように、環状の持物は、雲岡に於ては主に第六洞に集中的に検出される。因に数例列記すると、①方柱上層北東隅層塔西側菩薩。②方柱上層北西隅層塔南側菩薩。③南壁上層東部龕右脇菩薩。④南壁上層西部龕右脇菩薩等に於て持物として確認される。

さて、この種の持物は、雲岡のみならず龍門やその他の遺蹟でも少なからずみられる。例えば、龍門第十四洞右脇菩薩

立像(図版Ⅹ)の右手の持物は、挿図15のように特殊な形をしているが、更に宝冠中央には、角状の宝珠が検出される。つまり、両者の共存関係が認められるので、これは極めて示唆に富む問題といえよう。但し、雲岡では両者を同時に所持する像は未確認である。しかしながら、同一空間に於ては、両者は明確に共存する。このような共存関係は、夙に、中央アジア・クチャ地域のカミン洞^{〔註〕}やマヤ洞等に於て確認されている。ここでも、両者を同時に所持する像は未確認であるが、ともかく、角状宝珠の起源の問題上、環状の持物は無視できない存在である。従って、前記の環状の持物との関連で、角状宝珠の起源は中央アジア・クチャ地域に求められることが裏付けられる。

おわりに

さて、以上の過程で我々は、雲岡に於ける角状「宝珠」の諸問題を様々な角度から考察してきたが、既に冒頭でも断わっておいた通り、本稿は、もともと、稀有な角状「宝珠」に関する系統的研究の基礎的段階の一翼を担うものである。従って、本稿では、初めて雲岡的・宝珠とも呼称できるような角状「宝珠」の実態がほぼ解明されたといえよう。管見によれば、この雲岡的宝珠は、中国内地に於ける角状「宝珠」の二大系統の一方を最も端的に代表するものであり、もう一方の代表例・龍門とは、様式上の相異が顕著である。両者の源

流は何れも中央アジアに求められるが、この両者にどのような経路でどのような「宝珠」が流入し、かつその中から前述のような相異なる角状「宝珠」が形成されていったのかは未解決であり、又今後に残された課題の一つでもある。

ともあれ、現在中国内地では、雲岡と龍門との二大系統が際立って対峙している。管見の及ぶ限りは、後者の系統が東端の高句麗に至るまで広く分布し展開しているかの如く見えるが、果して今後どのような形勢で展開を辿るのか、この点、現代中国の諸遺蹟に関する調査の成果に強い期待を寄せるのは、恐らく私一人だけではないだろう。因に、敦煌に確認されるこの種の宝珠は、外形においては龍門系統であり、逆に本体においては中央アジア乃至雲岡系統である。このことに関しては極めて興味深い問題が潜んでいるが、後日稿を改めて言及を試みたいと考えている。

尚、雲岡的宝珠の存在は、現段階では最古であり、中央アジア系統を継承する反面、一部でそこから脱化した別々の要素を形成している。しかしながら、そこには若干未解決の問題も残されている。例えば、角状「宝珠」の起源地であるはずの中央アジア地域に於て、雲岡期（五世紀後半）以前の作例を探究することも重要な課題である。しかし、雲岡を基準作例として、今後我々は、同種の作例の検出される各々の諸遺蹟との比較検討を試みることができよう。

註

- (1) 日本に於ける「宝珠」の展開について詳しく触れたものに次の高著がある。関忠夫「宝珠の造形意匠」(『東京国立博物館紀要第一〇号』昭和五十年) 同「宝珠に関する二、三の問題」(『MUSEUM』第三〇〇号、美術出版社、昭和五十一年) 尚、右の論文中にて、角状「宝珠」については、詳しく言及されていないが、所謂「宝珠」に関する卓見が展開されており、極めて示唆に富む。
- (2) 京都大学人文科学研究所報告書『雲岡石窟』(全十六巻・一九五一年一五六六年)
- (3) 前掲書、第十二・第十・第九卷等。
- (4) A.Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin, 1912.
A.Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin, 1920.
- (5) 拙著「中央アジア・トングタ遺蹟仏教寺院壁画断片に表現された『宝珠』について」(『別府大学紀要二十一号』昭和五十五年)。
- (6) クチャ地域①財宝洞(Schatzhöhle)②海馮洞(Hippokampenhöhle)③輪をくわえる鳩洞(Höhle mit den ringtragenden Tauben) トウルファン地域④Cigankol ⑤Klemenz 6.
- (7) クチャ地域①航海者洞(Seefahrerhöhle)②桑人洞(Höhle n.d.Musikerchor) ③マヤ洞(Mâyähöhle) ④阿闍世王洞

(7) Ajatasatruhöhle) ⑤カマン洞 (Kaminhöhle) ⑥クムトゥ
ラ21洞 (Ming-Öi bei Quntura, H. 15 der I. Schlacht)

(8) クチャ地域①マヤ洞②クムトゥラ19洞 (Ming-Öi bei
Quntura, Hauptgruppe, H. 19) トウルファン地域③トユク壁
画

(9) クチャ地域①輪をくわえる鳩洞②クムトゥラ (Ming-Öi bei
Quntura, 2. Schlacht) トウルファン地域③Klemenz 6.

(10) ①賓陽洞 ②蓮華洞 ③第十四洞
(11) ①古陽洞 ②賓陽洞 ③蓮華洞

(12) 雲岡と龍門とは、まず、宝珠本体の形態が異なる。つま
り、雲岡では本体の外形が、六角形状であるが、龍門では、
五角形状を示し、然も、全てが縦一種に安置される。次に、
龍門では殆どが蓮台状の中に宝珠を安置するが、雲岡では蓮
台状は一例もなく、一部が、承盤、或いは基台状の上に宝珠
を安置する他は、殆どが、本体自身、単独で、光背及び仏龕
面に表現される。以上の相異は、両者の単なる時間的差異に
よるものではなく、恐らく、その根拠とする仏教思想や系統
が異なることによるものと考えられる。詳しくは、今後に譲
る。

(13) 中尊は偏袒右肩・施無畏・与願印・無髪、左脇侍は宝瓶宝
冠を被り左手は衣端を持し垂下、右手は蓮蕾を持し胸前に置
く。右脇侍は化仏宝冠を被り左手を胸前にし、右手に蓮蕾を

持し垂下。以上の諸特徴を持つことから、阿弥陀・勢至・觀
音の三尊仏と考えられるが、中尊の名称については、無量寿
仏の方が正鵠を得ていよう。

水野精一「雲岡の阿弥陀像について」(『中国の仏教美術』平
凡社、昭和四十三年)二六九—二七一頁参照。

(14) 東西両仏龕内の諸天人は全て高髻長裳形で表現される。但
し、それらは註15の③とは一部似ているが、明白に円光を有
し、然も長い下裳の先から足が覗く点で全く異なる。

(15) 四仏龕の諸天人は、次の三種に分類される。

①逆髪で天衣と短い腰衣を着し、円光を有す童子形。

②剃髪で天衣と短い腰衣を着し、円光を有す童子形。

③高髻で長い下裳を着し、円光に替わり、天衣が楕円状の光
背を形成する天女形、尚、下裳によって足は完全に隠され
る。

以上の中で③は、雲岡末期を代表する天人であるが、①・②
は、雲岡第六洞あたりを境として次第に消滅し、龍門期には
完全になくなる。

水野精一「逆髪像について—雲岡図像学—」(『前掲書』二七二—
二八六頁)註2前掲書第十卷所収「雲岡様式から龍門様成
へ」(水野・長廣共著)参照。

(16) 南面東部、樹下神像。同西部、シュッドグナ王夫妻。
西面南部、釈尊降誕。同北部、九龍の灌頂及び騎象掃城。
北面西部、アシタ仙觀相。同東部、騎象太子。

東面北部、國王と王妃、同南部、宮門を出る（未定）。

(17) 東面に文殊、西面に維摩を安置。尚、第七洞南壁にもこの主題はみられるが、そこでは第六洞の配置とは全く逆。つまり、東面維摩、西面文殊となる。

(18) 仏伝図は定形式とパネル形式を併用しているが、そこには連続性と一貫性が看取できる。又、第七・八・十二洞でも仏伝配置はみられるが、主に仏伝形式で、そこには連続性や一貫性は認められない。因に第六洞の仏伝図を若干あげると、
①太子射藝②宮中歡樂③シュッドグナ王と太子④四門出遊⑤出家踰城⑥白馬との別離⑦山中苦行⑧降魔成道

⑨四天王奉鉢⑩初転法輪⑪カアシャバ帰伏等
(19) 註15・③参照。以下、第六洞の諸光背にみられる天人の殆どは、この③と同種である。

(20) 註15・19参照。
(21) 類例を二つあげておくと、

- ①「譬如如意寶珠難見難得。若有見者所願必果。」
- ②「世尊。譬如無價摩尼寶在所住處非人不得其便。若男子若女人有熱病。以是珠著身上。熱病即時除盡。若有風病若有冷病若有雄熱風冷病。以珠著身上皆悉除愈。若闇中是寶能令明。熱時能令涼。寒時能令溫。珠所住處其地下寒不熱時節和適。其處亦無諸餘毒螫。若男子女人為毒蛇所螫。以珠示之毒即除滅。復次世尊。若男子女人眼痛痛暗瞽。以珠示之即時除愈。若有癩瘡惡腫。以珠著其身上病即除愈。復次

世尊。是摩尼寶所在水中。水隨作一色。若以青物裹著水中。水色即為青。若黃赤白紅縹物裹著水中。水隨作黃赤白紅縹色。如是等種種色物裹著水中。水隨作種種色。世尊若水濁以珠著水中即為清。是珠其德如是。」

①「大智度論」卷第三十五、三二三頁（大正新編大藏經）第二十四卷 No.1509）。

②同右書、卷第五十九、四七七頁、参照。
(22) 註17参照。

(23) 六体のうち一一体だけは、右手を胸前にし、左手を臍前におき、第一・二指を捻じ垂下。

(24) 頭部は剃髪形に近く、下裳は足首の覗くあたりまでのびている（八体のうち六体）。その他の二体は、割と短い腰衣を着ける点だけが少し異なる。

(25) 三角持送構造に関する系統的で詳細な論及に次の論文がある。

村田治郎「東洋建築系統史論（其二）」（『建築雑誌』第四五輯第五四五号、昭和六年）参照。

又、アフガニスタンに於ける展開について触れたものとしては、

西川幸治「パーミアン・フォラディ谷の石窟群」（『仏教芸術』第五十五号、毎日新聞社、昭和三十九年）参照。

(26) この逆時計廻りは、地上面においては、右遷の方向にあたり、まさしく、天上と地上のすべてのものに、右遷の修法が

意図されていたと考えられる。

(27) 諸天人は全て註14の天人と同種。

(28) このトンネルの施設は、第九・十洞に始まり、後、第五洞でも造られている。このような右遷の修法の行われうる空間は、信徒の直接的宗教儀式の場となったと考えられる。

(29) 中央アジアのクチャ地域にも、僧侶と追隨する供養者群の作例が確認される。因にこの作例では人物群の上方の虚空に輝きを放つ角状宝珠が検出されるので、第九洞と何らかの関連が辿れるものと考えられる。

A.Grünwedel, *ibid.*, Ming-öi bei Quntura, Hauptgruppe, H.19, Höhlen29-23, Fig.53, S. 27.

(30) 仏・菩薩の三尊形式を石窟の主尊とすること、或いは、偶像を本尊とすることは、この第九洞のみ。尚、大像を本尊とする例は、第五洞(坐仏)・第十洞(立像)・第十三洞(交脚像)だけ。

(31) 西壁上層涅槃諸窟区画内には、中央アジアにもみられる図様が検出される。

A.Grünwedel, *ibid.*, Ming-öi bei Qyzyi, Höhle n. d. ringtragenden Tauben, Fig.259, S.120.

(32) 八体共に逆髪形。

(33) 諸天の全ては高髪長裳で、足首が覗く。尚、宝珠は凝視すれば、六角形状であることが確認される。

(34) 完全に図様上の一致は認められないが、雲岡の場合は、中

央アジアの例と比較すると、かなり単純な形をしている。換言すれば、中央アジアの場合は、発展した形とみなすことができる。恐らく両者は、同一系統でありながらも、時間差があるものと推察される。因に、法隆寺釈迦三尊像両脇侍宝冠中にも同種の図様が検出される。

A.Grünwedel, *ibid.*, Tempel Bazaklik(Murtuc), Halle19, Fig.562, S.272.

(35) 逆髪・短い腰衣、円光、等の諸特徴をもつ。

(36) 高髪長裳形(足首が覗く)、逆髪で短い腰衣の二種。尚第八洞明窓天井部にも同構図がみられる。但し、天人は、逆髪形一種。

(37) 東面は、観音菩薩、西面は普賢菩薩と推察される。

水野精一、前掲書「観音菩薩と普賢菩薩―雲岡図像解―」二六二―六八頁参照。

(38) 八体共に、高髪長裳形(足首が覗く)。

(39) 例えば、シャーマ本生、儒童本生、燃燈供養の因縁談等。

(40) 持物の形状から宝珠と考えられる。尚「雲岡石窟」の著者も同様に考えておられる。

(41) 形状から宝珠と考えるよりも、香爐にふさわしいものである。とすると、二像は、宝珠と香爐を奉持し、対置されていることになる。

(42) 例えば次の図様と類似性が強い。A.Grünwedel, *ibid.*, Ming-öi bei Quntura, 2, Schluclu, Fig.22, S.15.

(43) 「即時諸天。於虛空中。高聲唱言。過此無量無邊。百千萬億。阿僧祇世界。有國名娑婆。是中有佛。名釋迦牟尼。今為諸菩薩摩訶薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。汝等當深心隨喜。亦當禮拜供養。釋迦牟尼佛。彼諸衆生。聞虛空中聲已。合掌向娑婆世界。作如是言。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。以種種華香。瓔珞幡蓋。及諸嚴身之具。珍寶妙物。皆共遙散。娑婆世界。所散諸物。從十方來。譬如雲集。變成寶帳。遍覆此間。諸佛之上。于時十方世界。通達無礙。如一佛土。」
岩波文庫『法華經』下、如來神力品第二十一、一五六―八頁参照。

(44) 因に「雲岡石窟」の著者は、私の言う角状「宝珠」に関して、「六角形」乃至「六方体」の切子という極めて示唆的な名称を採用しているが、それは、私が拙著で触れた透過性の四角柱状を指示するものと考えられる。但し、雲岡の場合のそれは、透過性を示すような特徴が検出されず、従って、私はあえて「四角柱状」の名称を採用せず、ただ角状（非珠）としか呼称していない。前掲書の採用する名称は若干検討を要するものと考えられる。

(45) 四体共に高樹下装形で足首が覗く。

(46) 註21前掲書、巻第九十八、七四〇頁。

(47) 註43前掲書、下、薬王菩薩本事品、二〇二頁参照。

種々の燈として、蘇燈・油燈、諸の香油燈、葡萄油燈、須曼

那油燈、波羅羅油燈、婆利師迦油燈、那婆摩利油燈、等がある。

(48) 前掲『法華經』下、薬王菩薩本事品、一九六頁参照。

(49) 前掲『法華經』中、授学・無学人記品、一三八頁参照。

(50) 前掲『法華經』中、提婆達多品第十二、二二二―二二四頁参照。「爾時龍女。有一寶珠。價直。三千大千世界。持以上佛。佛即受之。龍女謂智積菩薩。尊者舍利弗言。我獻寶珠。世尊納受。是事疾不。答言。甚疾。女言。以汝神力。歡我成佛。復速於此。當時衆會。皆見龍女。忽然之間。變成男子。具菩薩行。即往南方。無垢世界。坐寶蓮華。成等正覺。三十二相。八十種好。普為十方。一切衆生。演說妙法。爾時娑婆世界。菩薩聲聞。天龍八部。人與非人。皆遙見彼。龍女成佛。普為時會。人天。說法。心大歡喜。悉遙敬禮。無量衆生。聞法解悟。得不退轉。無量衆生。得受遺記。無垢世界。六反震動。娑婆世界。三千衆生。住不退地。三千衆生。發菩提心。而得受記。智積菩薩。及舍利弗。一切衆會。默然信受。」

要するに、龍女が、無価の寶珠を仏に献上するや、忽然として、龍女は男子となり、自ら求法者として無垢世界に於て、「さとり」をひらいて仏となったことが、右記にみられる。ここで、「寶珠」は龍女の希求を成就させるものとして、その万能の靈力を發揮し、文字通り「如意寶珠」、「如意隨意」として蔽存している。

(51) 前掲『法華經』中、法師品、一四二―一四四頁参照。

(52) 前掲『法華経』下、法師功德品第十九、九〇—一二七頁参照。

六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)清淨。凡夫が法華経の力によつて勝れた根の用を得ること、即ち眼耳鼻舌身意の六根の一一の根の中において、能く色を見、声を聞き、香を弁じ、味を別ち、触を覺し、法を知ることができるようになること(六根互具互用)である。

(53) 註3参照。

(54) 註5参照。

(55) 各洞の編年については『雲岡石窟』の著者の説に従う。

(56) 塚本善隆「沙門統曇曜とその時代」(『塚本善隆著作集』第一卷北朝仏教史研究所収、大東出版社・昭和四十九年)六七—九五頁参照。

(57) 塚本善隆「魏書釈老志の研究」前掲書、第一卷、参照。

(58) 尚、天梯山石窟について若干言及した論文に次のものがある。

長澤和俊「雲岡の仏教美術について」(『東洋学術研究』第七卷第六号、東洋哲学研究所・昭和五十三年)参照。

のち「シルクロードと仏教文化」(『東洋哲学研究所・昭和五十四年、七九—一四頁)所収。同著者「中国石窟寺院にみる弥勒像」(『大法輪』第四十五卷第二号、大法輪閣・昭和五十三年)一二六—二九頁参照。

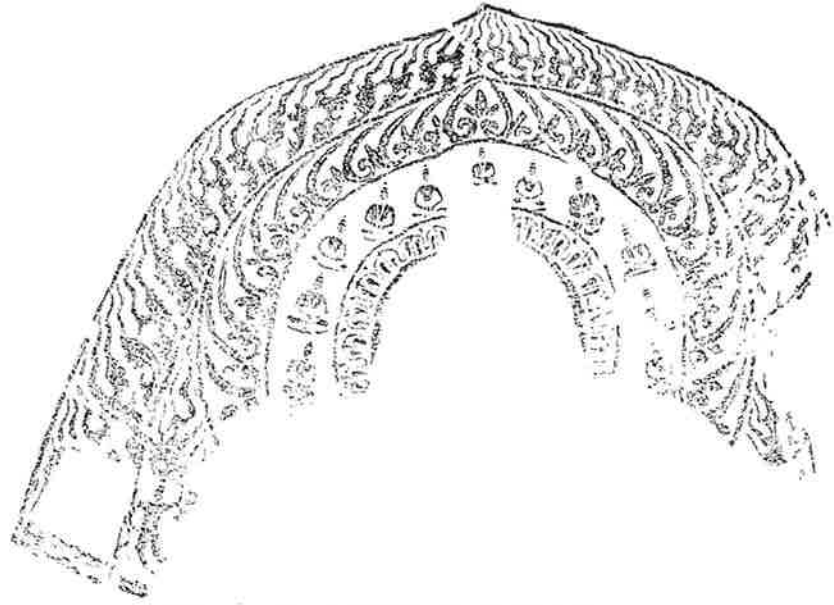
(59) A.Grunwedel, *ibid.*, Ming-ti bei Qyzyl, Höhlengruppe mit

dem Kamin, Fig.92, S.46.

(60) A.Grunwedel, *ibid.*, Ming-ti bei Qyzyl, 2. Anlage, Höhle 9; Mayahöhle, Fig.383, S.166.

〔附記〕

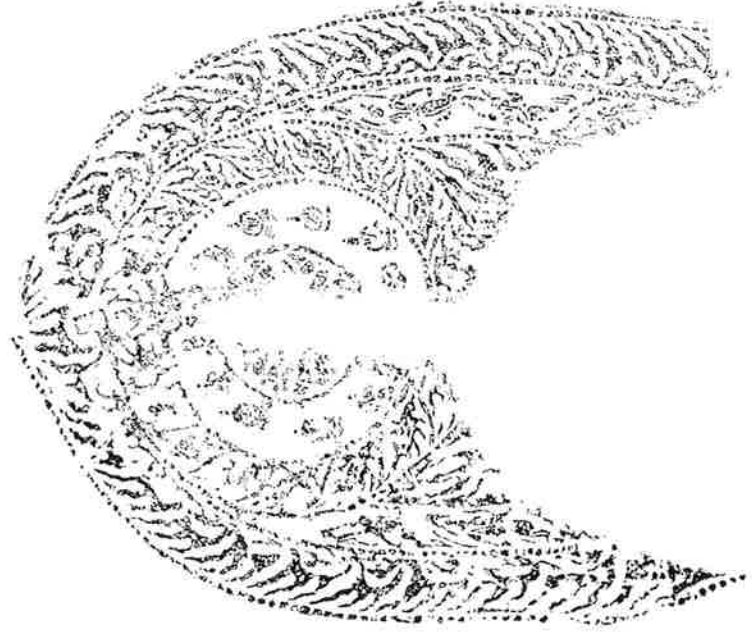
本稿添附の図版につきましては、早稲田大学美術史学研究室の御厚意と御協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表する次第である。尚、図版I—XIは、『雲岡石窟』全十六卷(京都大学人文科学研究所)による。但し、図版Xのみは、『龍門石窟』(山本明・図録)による。



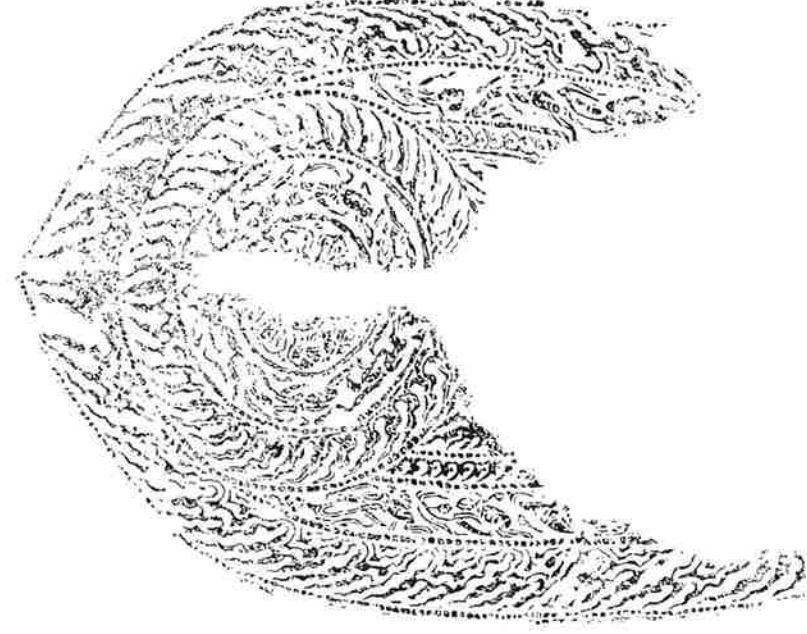
图版 I ㉓ 第十七洞西壁右脇大龕坐仏光背



图版 I ㉔ 第十七洞東壁左脇大龕立仏光背



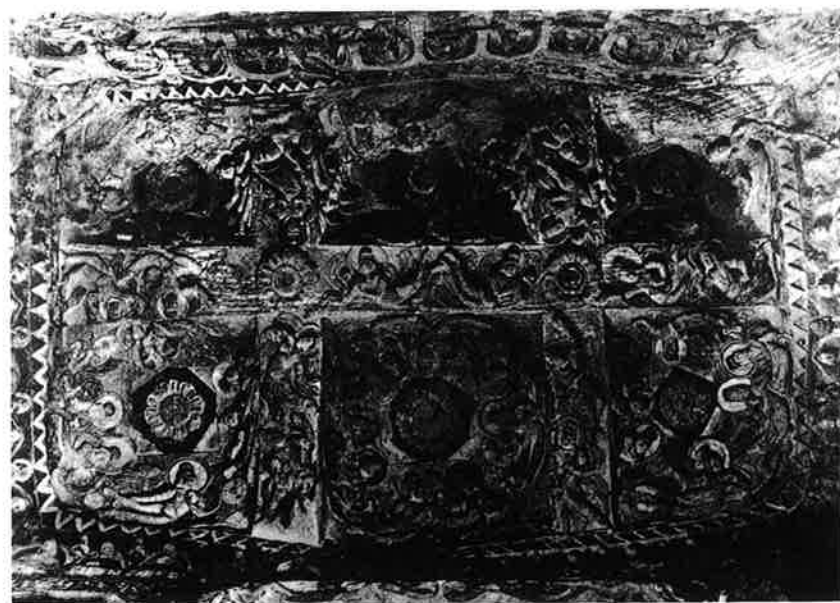
图版II⑤ 第6洞方柱北面下層二仏並坐像西方仏光背



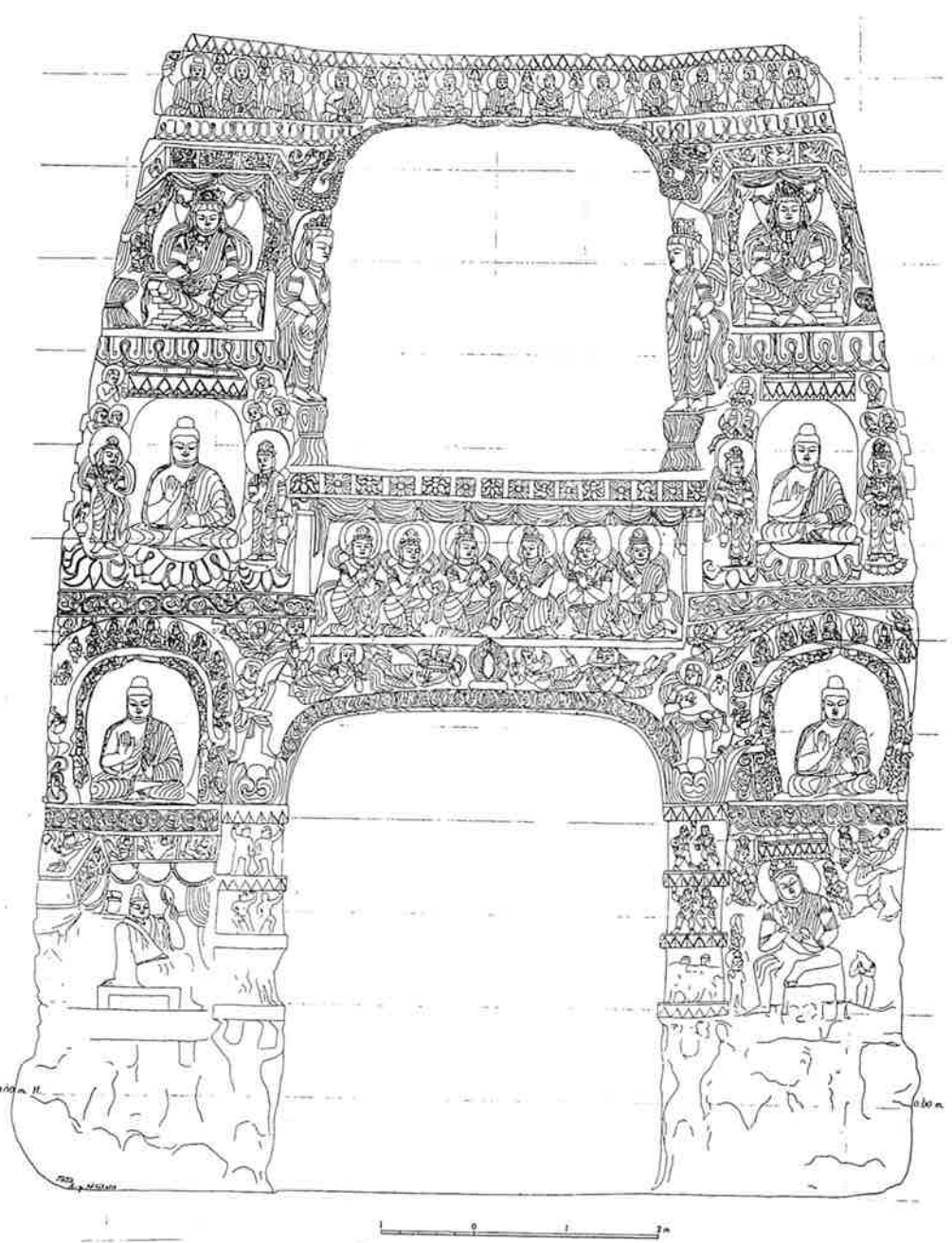
图版II④ 第6洞方柱北面下層二仏並坐像東方像光背



图版III ③ 第7洞主室南壁拱额



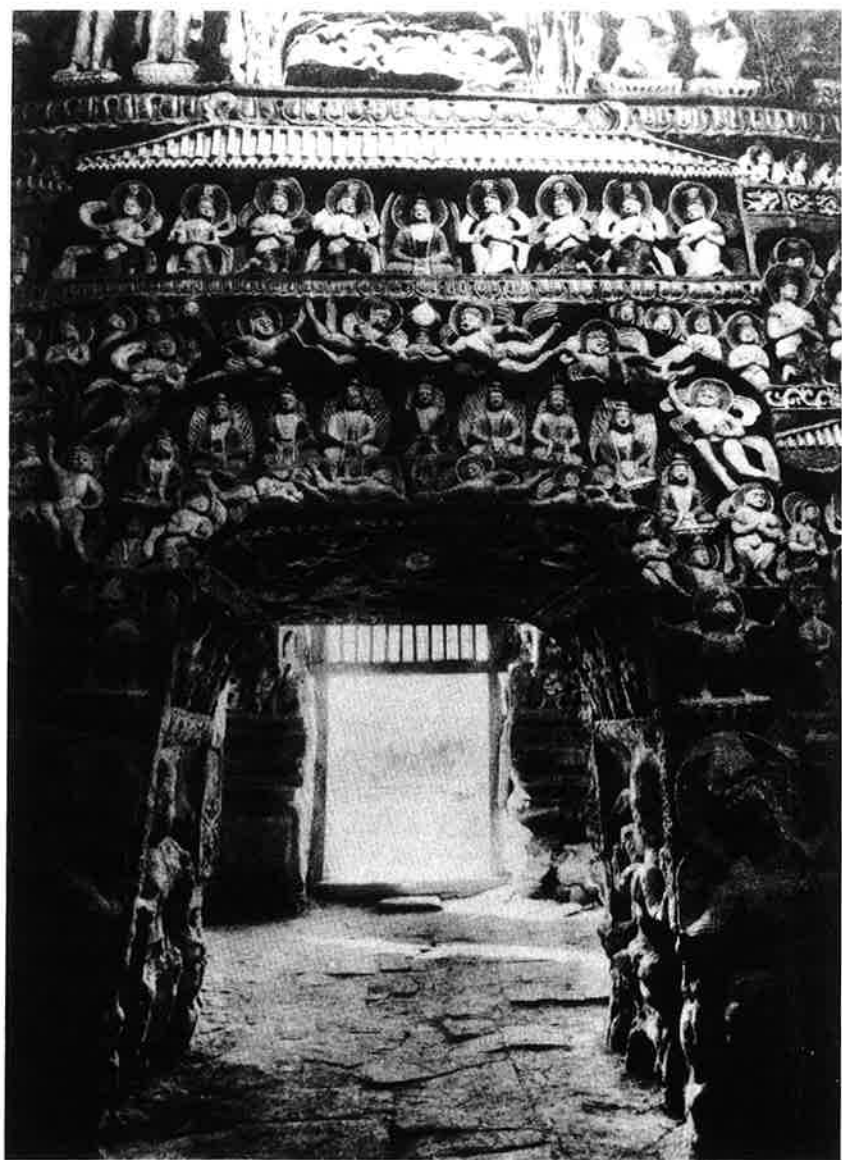
图版IV 第7洞主室天井全图



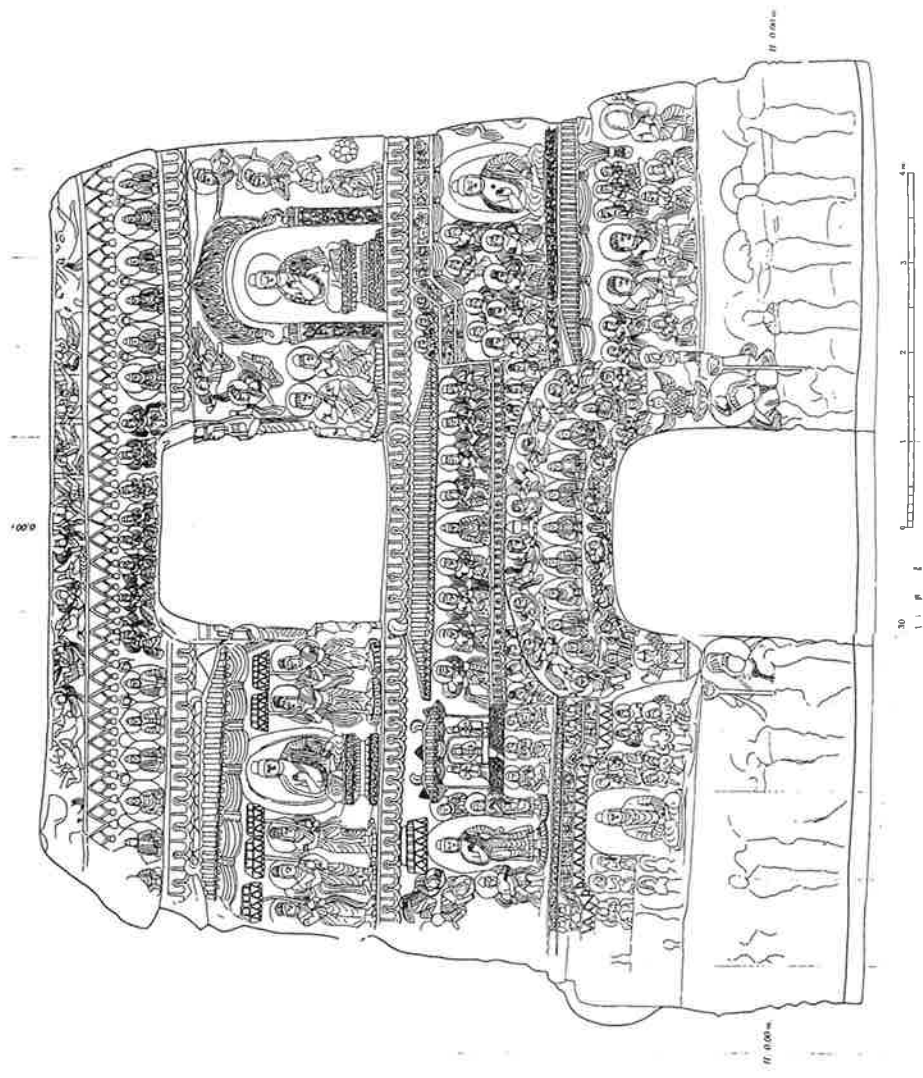
图版III⑥ 第7洞主室南壁立面



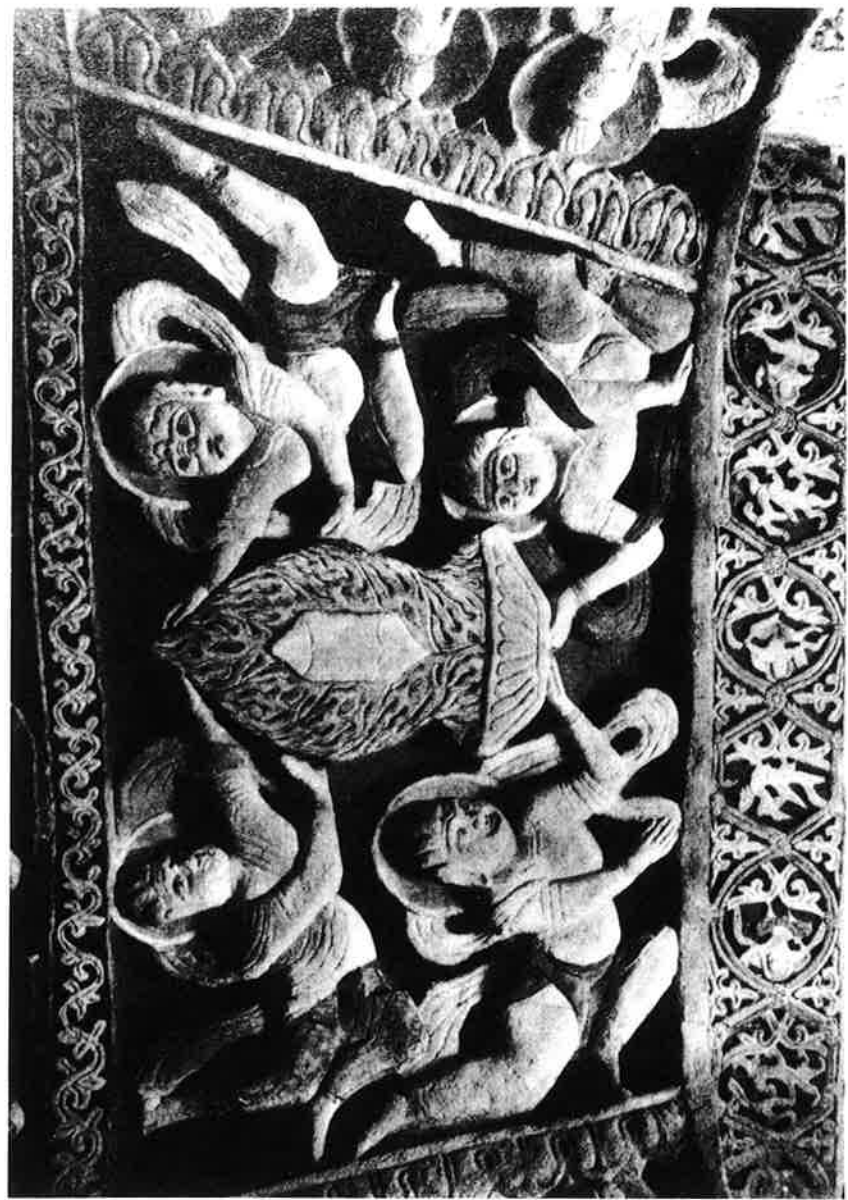
图版V 第7洞主室天井〔V〕部分



图版VI④ 第9洞主室南壁



图版VI⑤ 第9洞主室南壁



图版 VII 第九洞拱門天井



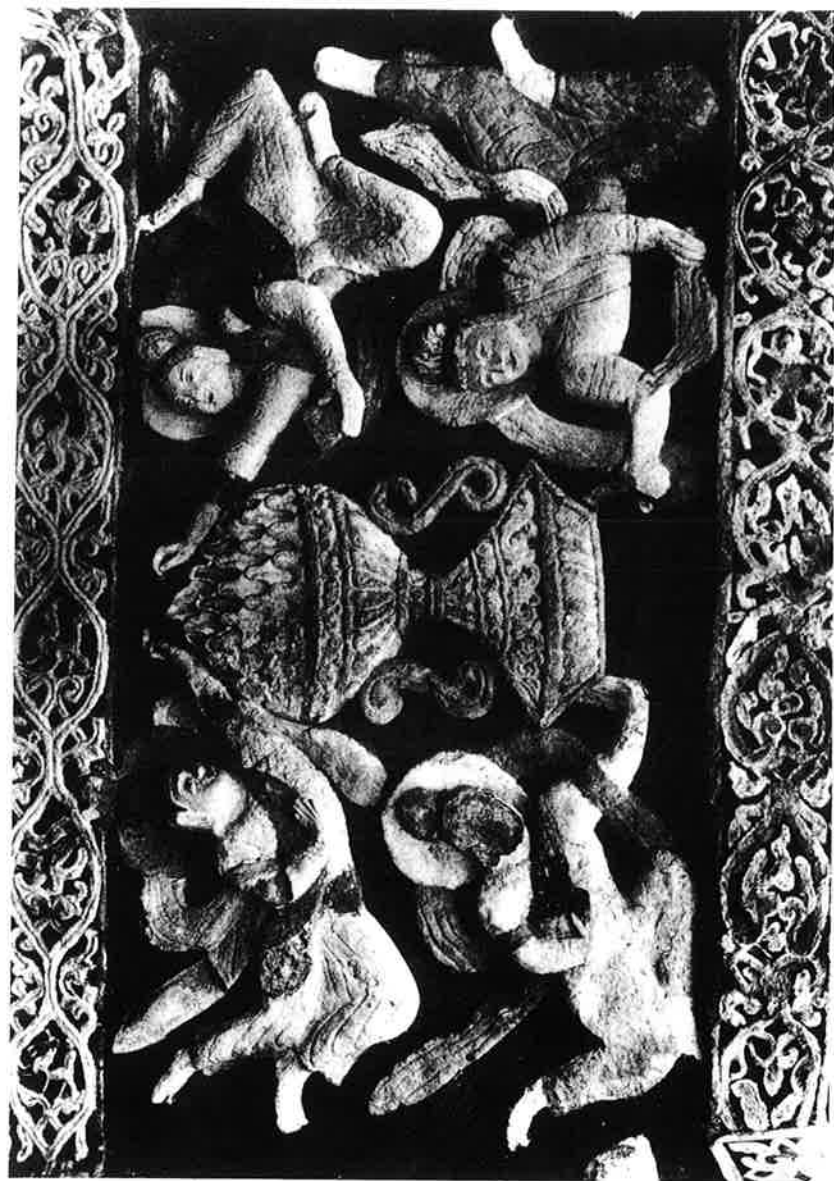
图版VIII 第9洞前室北壁东面第二层



图版 IX 第13洞明窓東方像



图版X 第13洞明窓西方像



图版 XI 第10洞拱門天井「香爐」



圖版Ⅻ 龍門第14洞右脇菩薩立像